

言語行為主体性を発揮して学ぶための指導法に関する研究

坂東 智子^{*1}・貞安 菜央^{*2}

Research on teaching methods for learning with agency as language users

BANDO Tomoko ^{*1}, SADAYASU Nao ^{*2}

(Received August 3, 2023)

キーワード：言語行為主体性、ラーニング・コンパス、エージェンシー、生きた言語の学び、指導法

はじめに

「コロナ禍」をはじめとして、予測不可能で唯一解のない複雑な問題を抱えた VUCA 時代（不安定さ、不確実さ、複雑さ、曖昧さ）となり、認知的柔軟性や他者視点を獲得する力がますます必要とされている。子どもたちは現時点では想定されていない課題に直面し、それらを解決していかなければならない。そのような時代を生き抜いていかなければならない子どもたちに必要な言葉の力とはどのようなものか。

本研究ではそれを「言語行為主体性」と措定した。「言語行為主体性」は、OECD2030 の中核的な概念「エージェンシー (Student agency)」を言語行為に限定したものである。「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力 (the capacity to set a goal, reflect and act responsibly to effect change)」(OECD, 2019) がエージェンシーの定義である¹⁾。エージェンシーを発揮しているとは、自分たちが実現したい未来を、自分で考えて、目標を設定し、そのために必要な変化を実現するために自ら責任をもって行動にうつしていることだといえよう。そう考えると、「言語行為主体性」を発揮して学ぶ子どもたちの姿とは、自分たちが実現したい未来のためにはどのような言葉の力が必要なのか、どうすることが自分の生活や属する様々な共同体にとってより良い言語行為となるのか、そういった言葉の学びの先を考えて言葉を学ぼうとし、学んだことを次の言語行為に活かそうとしている姿だといえる。教師が主導して目標や方法を提示するだけでなく、子どもたちが学びの主体となって自分たちで目標を設定したり方法を選択したりする場が設けられていて、学びの意味や改善すべき点の振り返りが次の学びに活かされていくような授業が、子どもたちが言語行為主体性を発揮して学ぶ授業だといえる。そのためには、教師はどのような指導や手立てを講じるのが有効か、それらを探究するのが本研究である。

先行研究として、筆者と共同研究者である貞安の「言語行為主体性を育成する『比べ読み』指導に関する研究」(2021)がある。「比べ読み」指導は文学的文章の指導において多く行われていた方法である。近年では、特に新学習指導要領の告示以降、複数教材(資料)の内容を比較検討して情報を統合したり構造化したりして、自分の考えを形成することが全教科的に求められていることから、説明文指導でも広く取り入れられるようになった指導法である。令和3年度中学校国語教科書でも同テーマで異なる立場の文章を2教材採録した単元が多数設けられるようになった。専門的知見をもつ複数の筆者の考えを比較検討したり、他の学習者と表現の吟味を行ったりする対話的交流が生まれやすく、言語行為主体性を発揮して学ぶための手立てとして有効であることが検証されている。その際に、附属光学園国語部が取組んできた判断型学習課題の設定や、Google Jamboard 使用が有効であることも明らかになった。

そこで、本研究では、これまでの判断型学習課題や Google Jamboard 使用は継続しつつ、新たな授業改善の視点を獲得するために、オランダのイエナプラン教育理論や日本でのイエナプランの言語教育実践を学ぶことで、新たな指導法や具体的な手立てを探っていくこととした。

*1 山口大学教育学部国語教育選修 *2 山口大学教育学部附属光中学校

1. 研究の概要

1-1 研究の目的

本研究の目的は、学習者が言語行為主体性を発揮して取り組める国語の学習指導に関する先行実践や理論を学び、得た知見を基に授業を立案、実践して、その手立ての有効性を検証するとともに、指導上の留意点や新たな課題を見いだすことで、VUCA時代に必要な言語の力を育成する指導法の開発を継続的に行うことである。

1-2 研究の方法

研究は次の2つの方向から実施した。

- ① 授業づくりの理念や授業方法に関する新たな知見を獲得するために、オランダのイエナプラン実践校の一つである学校法人茂来学園大日向小学校の先生方を講師に招き、イエナプラン講習会をZoomで3回実施した。
- ② イエナプラン講習会等で得た知見をもとに、授業立案、実践し、講習会前の実践と講習会後の実践を比較検討することで、子どもたちが言語行為主体性を発揮して学ぶための新たな指導法や手立てや留意点を明らかにする。

1-3 イエナプラン講習会の実施（実施要項より）

① 目的

本講習会の目的は、「言語行為主体性を発揮して学ぶための指導法に関する研究」課題において、授業づくりの理念や授業方法に関する新たな知見を獲得することである。そのために、日本におけるイエナプラン認定校である学校法人茂来学園大日向小学校の教育内容や実践の実際について知り理解を深めるため、オンラインで講習会を実施する。

② 対象者

- ・ 山口大学教育学部附属光中学校国語科教員・やまぐち総合教育支援センター長期研修教員・下関市立安岡小学校教員
- ・ 国語教育選修坂東ゼミ生

③ 招聘する講師

久保礼子氏：学校法人茂来学園大日向小学校校長
原田友美氏：学校法人茂来学園大日向小学校教諭
細萱 彰氏：学校法人茂来学園大日向小学校教諭

④ 日程・内容

2023年1月12日 18:00-20:00 第1回 イエナプラン校としての大日向小学校（講師：久保礼子氏）
2023年1月20日 18:00-20:00 第2回 学習ラインを活かした国語科教育下学年の実践（講師：原田友美氏）
2023年2月 9日 18:00-20:00 第3回 上学年の国語科の実践（講師：細萱彰氏）
Zoomで実施

1-4 実践①イエナプラン講習会前に実施

単元 論の共通点を読み取り、より効果的な述べ方を探る

～『人工知能との未来』『人間と人工知能と創造性』（光村図書中学3年）～

1-5 実践②イエナプラン講習会後に実施

単元 『初恋』島崎藤村（光村図書中学3年）

1-6 分析および考察について

実践①②についてイエナプラン講習会で得た知見をもとに考察を行った。

2. 研究の実際

2-1 イエナプラン講習会内容

① 第1回 イエナ講習会 (2023. 1. 12) 参加者：計 23 名

【久保礼子氏講話内容 当日スライドより】

- ・大日向小の概要：2019年4月 開校（一条校）初年度入学者70人，スタッフ12人
2022年度 在籍者数（小152人，中21人）、スタッフ（小24人，中13人（非常勤、インターン含））
- ・イエナプラン校としての大日向小学校
建学の精神：誰もが、豊かに、そして幸せに生きることのできる世界をつくる
イエナプランの特徴：異年齢学級，リビングルームとしての教室，4つの活動からなる時間割（サークル対話，ブロックアワー，ワールドオリエンテーション，外遊び）
ワールドオリエンテーション（探求学習，7つの領域にわたるテーマで1年間行う，テーマ：めぐる1年，コミュニケーション，環境と地形，作ること・使うこと，技術，私の生，共に生きる）、例：大日向運動会を作ろう（1学期前半）、大日向の自然（環境と地形，上学年，1学期後半）
じゅうたんの部屋（学習支援コーディネーターが運営）
- ・大切にしていること
対話：異なる考えや気持ちを共有する
自立へ導く：選ぶ。決める。考える・大人はどんな声かけをするか？
違って当たり前：異年齢。同じことをしていない。その中での協働。
学びのオーナーシップ：子どもにある。個に応じた発達を支援する。
文化にする：問いかける。待つ。繰り返す。日常を。

（口頭でのお話から）

- ・日本の教育は画一的であり、そのメリットは確かにある。効率的であり、どこに行っても（転校しても）、ほぼ同じ内容の教育を受けることができる。
- ・週のスケジュールを自分で組むのだが、そこで問題は生じる。簡単すぎたり、やることがなくなったり。面談をしながら進めるが、週ではなく、1日のスケジュールを考えるとということも可能。個々が自分で自分のする必要のある学習を選択してスケジュールリングできるようにということが必要。
- ・「じゅうたんの部屋」：自律的な学びというのは、十分に教師が対応しなければ難しい。しかし、自律的に学ぶ練習をすることが「特別支援」的なケアが可能。子どもを分けるのではなく、子どもが必要ならば、そこに行く。そこに行き、自分が必要だと思うことを学ぶ。それはギフテッドにも対応する。
- ・自律ということは自分が選ぶことは重要。そのためにどう大人が声をかけるかということ。
- ・異年齢が大切なことは、違って当たり前ということ、本当に当たり前にすること。人と比較する話が、子どもの中で出てくるのが少ないという状況。自分がやったこと、やりたいことが中心の話になる。
- ・1年目には見えなかったこと、それが継続されていくと子どもたちに「文化」として継承される。指示することではなく、「どうしたらいい？」語りかける文化にするこの意味。
- ・20の原則、3つのコアクオリティを見直しながら、共生を重視。
- ・個別最適な学びと協働の学びは表裏一体。学びの個性化が言われるけれど、学びの個性化が許されない学校教育がおこなわれてきたのではないか。自分らしい学びをすることができるように。そうした子どもの学びが成立し、自分の学びに自分が責任を持つという意識が育っていけば、映像を見るだけでもイメージが湧く。リアルな子どもの姿をぜひ見たい。教師と子どもが最適な学び、指導の個別化を進める実感を得ることが重要。

【参加者 質疑】 敬称略、一部は割愛。

貞安：自律学習のなかで、どこまで教師が関わりを持っていけばいいか。公立校でもできることはないか。

久保・細萱：教えていけないわけではない。自律の段階を見て、教えるべきことは教える。

ブロックアワーでやるべきことも最初は教師が示す。子どもの様子を見て、進めていく。

異年齢での授業、一斉授業を主としない、特別支援学級を作らず「じゅうたんの部屋」を活用することは、難しいし、公立小との違いもあり苦勞しつつ教員同士も話し合いつつやっている。

【チャットに寄せられたメッセージ】一部は割愛。

- ・本日はありがとうございました。学びのオーナーシップは子どもにあること、目の前の現実から出発することを忘れずに、明日からの授業もがんばりたいと思います。
- ・貴重な学びの時間をいただき本当にありがとうございました。最後にも述べたように、社会に出ていく子どもたちのために、教員ができること、という気持ちを持ち続けていきたいです。自分にできる精一杯のことを手立てとしてうっていくために、いろいろな教育の方法があることを学べることが本当にありがたいことだと思いました。大切なことは、目指すことが何なのかを見失わないことだというお話も大変心に残りました。信念をもってでも柔軟に、子どもたちと関わり合っていきたいと思います。

② 第2回 イエナ講習会記録(2023.1.20)参加者：計18名

【原田友美氏講話内容：坂東メモ】

・23の学習ラインについての説明：オランダのイエナプラン教育とフレネ教育の専門家によって共同開発された言語教育の指導書『DAT plus』。『DAT plus』とは、オランダにおけるオールタナティブ教育の言語教育の成果である。DATの考え方の4つの特徴。

- A 生きた言語使用状況の中での発達支援 B 探求活動における言語発達
C 生きた文脈を使った読み書きの学習 D クオリティーの高い公衆に向けた仕事

子ども自身の〈好奇心〉に動機づけられていることが重要である。実践的には、4領域(聞く・話す／書く／読む／言葉の使い方・文法)に、23の学習活動が置かれている。それぞれの学習活動は、(学年段階ではなく)学習者それぞれの言語の発達段階(フェーズ)によって4つに分類された、一連なりの学習目標・内容等が表になって示されている。オランダでは、この表自体や学年段階に縛られない一連なりの学習目標・内容等の束のことを「学習ライン」と呼ぶが、『DAT plus』ではこれが23個用意されている。『DAT plus』はオランダの著者らが、その前身である『LL』、『DAT』という2冊の言語教育のテキストを継承・発展させたものである。『LL』(Levend Lezen, dat's de kunst: 生きた読みの学習, それこそアート)は2003年に出版されたものである。これらは長い年月に及ぶ実践と研究の積み重ねによって作り上げられてきた。大日向小学校では現在日本の国語教科書を用いつつこの23の学習ラインを組み合わせて、言語教育を行っている。

・大日向小学校での下学年の言語教育実践例の紹介

小学校3年生の教科書教材「すがたを変える大豆」(光村図書)を学んだ後、下学年の子どもたちにそれを説明する学習が行われた。また、その後、実際に味噌を作るためにレシピを使い(23の学習ラインのひとつ「レシピを使う」に関連する)、実際に味噌づくりを行った。

また、地域の養蜂場の方から提供された「ハチの巣」から蜜蝋づくりを行ったり、ハチに刺された時の手当本等の作品作りが行われた。

【参加者 質疑】敬称略、一部は割愛。

坂東：ワールドオリエンテーションは日本でいえば総合学習に相当し、ブロックアワーは教科学習に相当すると考えてよいのですか。

原田：大きく捉えればそういったことになる。ただしワールドオリエンテーションは探求学習であり、7つの領域にわたるテーマで1年間行っている。テーマ(めぐる1年, コミュニケーション, 環境と地形, 作ること・使うこと, 技術, 私の生, 共に生きる)。

技術をテーマに、車について模型を作ったり、実際に自動車会社の人に話を聞いたり、班ごとに発表を行ったりした。

大塚：読むことの領域で、例えば、授業のめあてや振り返りなどは行っているか？

原田：下学年の場合は、自分が読んで考えたことや疑問に思ったことなどを自由に書いたり話したりすることが多く、こんなところに注目したら面白いといったいわゆる読み方についての振り返りといったものはそれほど行っていない。

③ 第3回 イエナ講習会記録(2023.2.9)参加者：計13名

【細萱彰氏講話内容：坂東メモ】(第1回と重複する部分は割愛した)

- ・教室の様子(グループメンバーも最初は教師が決めるが、その後は子どもたちが自ら異学年の組み合わせ

を自然に作るようになる)

- ・異年齢が大切なことは、違って当たり前ということを、本当に当たり前にする。
- ・実践のお話：修学旅行に行く前に、自分が調べたいテーマ、話をしてみたい人を事前に決めて依頼動画の作成をする。その準備として台本を作り、校長先生に聞いてもらう等の練習を行う。

読書家の時間では、読みの活動とあわせて要約ノートなども作成する。

作家の時間では、子どもたちが物語の創作を行い、他の人の作品にファンレターを出す。最初はファンレターがもらえなかった子どももいたが、ファンレターをもらいたいという気持ちもあって創作にも熱心に取り組み、結局全員がファンレターをもらうことができた。

最後に子どもたちの作品を2つ、紹介して下さった。(1つは長編であったため途中までであった)

- ・次年度はワールドオリエンテーションに組み込んでいた言語活動をブロックアワーに行うということも検討している。年間のカリキュラムの作成が大きな課題である。

【参加者 質疑】敬称略

坂東：中心になる言語の技能とはどういうものですか。

細萱：例えば、情報提供・報告・指示・説得・議論、手紙・レポートなどを書くなど。

大貝：異学年学級の良さについて。

細萱：異年齢が大切なことは、違って当たり前ということを、本当に当たり前にする。必ずしも上の学年のものが教えるとは限らないということ。

若木：ユネスコの「学習権宣言」の1番目に学習権とは、読み書きの権利であり、とあるが本物の読み書きの力をつける必要がありますよね。

細萱：例えば、作家の時間で創作をするときに、設定を考えて次に構成を考えるというような手順を必ず踏まなければならないということではないことがわかる。物語を書くことで、学習指導要領の「書くこと」の指導事項は全部カバーできている様子がみえる。

この後、作品の作者の背景などの話もあり、活発な質疑応答があった。

【参加者からのメッセージ】一部は割愛。

・本日はありがとうございました。作品を聞いて実際に子どもの様子を見てみたいと思いました。また、子どもが主体となる学習のために子どもの生活の中にある言語活動を意識化することが大切だと感じました。子どもたちの興味をもって何をテーマにするかなど活動や作品の中から子どもを知ろうとしていることが伝わりました。

・本日はありがとうございました。こみ上げてきた思いは先ほど拙い言葉で述べさせていただきましたが、3人の先生方のお話を伺って、目の前の子供たちのために、イエナプラン教育を通してどんな学びを創っていくか、ということに対して、情熱はもちろんのこと、想像をはるかに超えるご準備もされていらっしゃるのだらうと思いました。各教科の学びをつなげられるように、綿密に、見通しをもって計画を立てていらっしゃることは、我々の公立の現場でもできないことは絶対にはないと思いました。純粋に、そんな学びを創っていききたいな、という気持ちです。ワークシートや、実際の子どもの成果物等を見せていただき、そちらも勉強になりました。また機会があれば、ぜひ勉強させていただきたいと思いました。本当にありがとうございました。

・本日はありがとうございました。この春から教壇に立つ身ですので、現場のイメージも湧かない状態でお話を聞かせていただきましたが、子どもたち一人ひとりに寄り添われた姿を拝見し、私もそのような立場でありたいと強く感じました。3回の会を通じて、子どもたちが自然に学びと出会うことが、子どもたちの意欲や資質能力の向上にいかにか大切であるかが分かりました。まずは、少しでも自然に学びに出会えるような仕掛けを得られるよう、情報収集に努めていきたいと思えます。今後とも、学ばせていただけると幸いです。

3. 実践の分析・考察

3-1 実践①イエナプラン講習会前に実施

(1) 単元：論の共通点を読み取り、より効果的な述べ方を探る

～『人工知能との未来』『人間と人工知能と創造性』(光村図書中学3年)～

(2) 指導上の留意点 (学習指導案より抜粋) (全6時間)

○第一次では、二つの文章を読み、論の共通点を捉えた上で説得力についての感想を共有する場を設定することで、述べ方の工夫に着目できるようにする。

○第二次では、「説得力が高いのはどちらの筆者か」という課題を検討する場を設定することで、筆者の主張と論理の展開とを結び付けながら、効果的な表現を捉えたり、問い直したりすることができるようにする。

○第三次では、理解したことや考えたことを、批評文にまとめる活動を設定することで、二つの文章を通して読み深めた、より効果的な表現を自覚することができるようにする。

(3) well-being につながる学びについて (附属光学園の研究テーマとの関連について)

本学園の国語部では、述べ方の効果や読後感の要因等を捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めていく子どもを育成する授業が、教科の本質に迫る授業だと捉えている。また、エージェンシーを発揮している姿を、言葉による見方・考え方を働かせている学びの過程を自覚する姿だと捉えている。本単元においては、「説明的文章を読み深めるために大切にしたい観点」を既習内容に基づいて設定し、その観点に対する自己評価と本時の課題に対する自分の考えを蓄積していく場を設ける。そうすることで、読者の立場と筆者の意図とを往還しながら、言葉にこだわろうとする様相が見られることを期待する。

このような学習を経験した子どもは、蓄積してきた自身の言葉への捉えを、これからの言語活動に活かそうとするようになり、well-being の実現につながるだろう。

(4) 研究授業の指導案より抜粋 (全6時間の4時間目、5時間目)

① 主眼：「人間に必要なことの述べ方に説得力があるのはどちらの筆者か」という判断型学習課題を検討することを通して、「人間」に対する筆者の見方や、利点と欠点の述べ方の工夫に気づき、自分の考えを形成することができる。

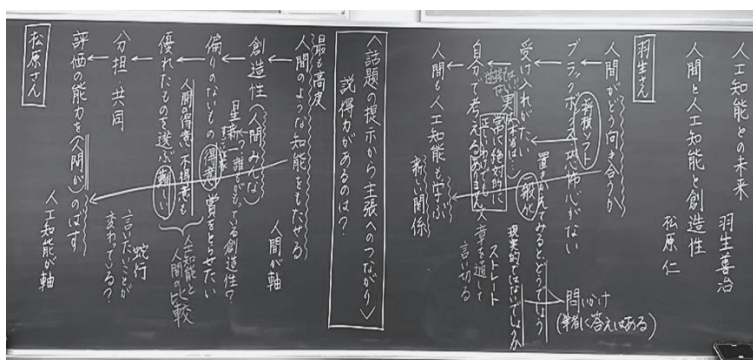
② 指導上の留意点

- ・ポイントとなる部分を並べて板書することで、比べる内容を明確にしたり、表現の特徴や違いに着目したりしながら検討できるようにする
- ・Google Jamboardを用いて判断型学習課題に対する考えを可視化することでそれぞれの立場や、その根拠となる部分を確認し合いながら検討が進められるようにする
- ・相反する意見や似ている意見を意図的に取り上げることで、自分の意見を述べたり、他者の意見を聞いたり、さらに考えを広げたりする意欲を高められるようにする
- ・文章を比較しながら、筆者の書きぶりの工夫に着目して意見を述べる子どもを価値づけることで、言語内容ではなく言語形式を根拠に語ることの重要性を感じられるようにする
- ・振り返りシートに、自己評価と課題に対する考えを蓄積させることで、前時からの変容や、単元を通して獲得した新たな読みの視点を自覚できるようにする

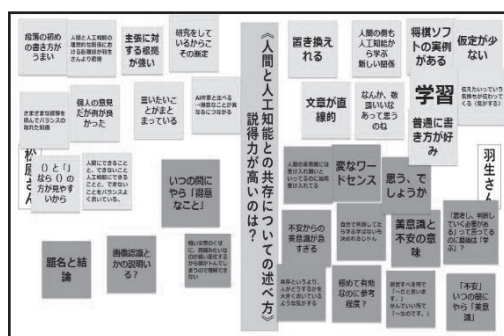
③ 評価規準と方法

論の中心となる部分のより効果的な述べ方を捉えたり、問い直したりしながら、「人間」に対する筆者の見方や、利点と欠点の述べ方の工夫に気づき、判断型学習課題に対する自分の考えを形成することができたか、発言や振り返りシートの記述からみとる。

(5) 学習の実際1 (板書、Google Jamboard を用いた判断型学習課題に対する考えの可視化)



資料1 板書



資料2 Google Jamboard

(7) 本時案

学習活動・内容	予想される生徒の反応	指導上の留意点	分
<p>1 音読を行い、各連の内容を確認する</p> <p>「われ」の恋の行方はどうなっていたか</p> <p>・ 詩の形式と内容 ・ 物語の展開</p> <p>2 判断型学習課題を用いて、工夫された表現を吟味する</p> <p>1連から4連の中で、最もキュンとした連はどこか</p> <p>・ 表現の効果</p>	<p>ア 一連、二連では、恋に落ちる純粋な「われ」の姿を描いている</p> <p>イ 三連では、成就した恋が少し大人っぽい描写で描かれていて、距離が縮まったことがわかる</p> <p>ウ 四連は、思い出の林檎島でデートをしている二人のやりとりの場面</p> <p>…(一連を選ぶ生徒) ……………</p> <p>ア 「林檎のもとに見えし」「花ある君」と、少女にフォーカスされた描写が、人を好きになる瞬間を表している</p> <p>イ 「花櫛」「花ある」と、少女のことが華やかに見えて仕方がない様子が描かれている</p> <p>…(二連を選ぶ生徒) ……………</p> <p>ウ 「白き手」ということは見たらわかるが、「やさしき手」とはあまり言わないので、「われ」が少女をどのように見ているかがわかる描写である</p> <p>エ 「薄紅」の色が、これから深まって色づいていく恋の模様を表しているようだ</p>	<p>・ 自分の気に入った連を音読させることで、定型詩のリズムを味わわせるとともに、効果的な表現に着目できるようにする</p> <p>・ Google Jamboardを用いて考えを出し合い、可視化することで、自分の考えを伝えたり、他者の考えを聞いたりすることへの意欲を高められるようにする</p> <p>・ 同じ連について考えをもっている生徒を連続して指名することで、各連への理解と工夫された表現への捉えを深められるようにする</p> <p>・ 連どうしのつながりからよさを見出している生徒がいたら指名することで、恋の成就していく様子が展開や情景の中で表現されていることに気付けるようにする</p> <p>※ 前時で四連を選んでいない生徒がいなかったため、Google Jamboardに付箋がつかなかった場合は、意図的に指名し、よさを語らせたり、「林檎」から「林檎島」になることでの情景の変化や、少女とのやりとりがあること（「われ」は返答しない）の効果を考えさせたりしたい</p>	5
<p>3 本時の学習を振り返る</p> <p>自分が気に入った部分以外に、恋の様子がよく表わされていると感じた部分はどこか</p> <p>・ 考えの形成</p>	<p>…(三連を選ぶ生徒) ……………</p> <p>オ ただの「息」ではなく、「ためいき」であることから、少女のことを思っている様子が伝わってくる</p> <p>カ 「君が酌みしかな」という描写で、一方的ではなく、互いの恋心であることが三連でわかるのがよい</p> <p>ア だんだん熱くなっていく初恋の恋心を描くための表現がたくさん使われていて、だからこそ、読んでいるこちらも照れくさくなるのだと思った</p> <p>イ 一連のフォーカスされた描写から、四連になるにつれて、少しずつ引きのアンブルになっているような情景が、映画の最初と最後のように思えた</p>	<p>・ 恋愛について詠んだ当時の他の詩を紹介することで、豊かな表現に出合わせるとともに、さらなる『初恋』のよさを感じられるようにする</p>	45 50

(8) 評価規準と方法

「最もキュンとした連」を吟味することを通して、心情描写や情景描写の工夫を見付け、自分の考えを形成することができたか、ジャムボードへの書き込みや発言からみとる。

3-3 分析および考察

イエナプラン講習会の第1回で示された「大切にしていること」5項目に照らして分析・考察を行う。

対話：異なる考えや気持ちを共有する
自立へ導く：選ぶ。決める。考える・大人はどんな声かけをするか？
違って当たり前：異年齢。同じことをしていない。その中での協働。
学びのオーナーシップ：子どもにある。個に応じた発達を支援する。
文化にする：問いかける。待つ。繰り返す。日常を。

(1) 対話：異なる考えや気持ちを共有する

実践①②ともに、判断型学習課題が設定されている。(資料1.2.5)

どちらも Google Jamboard を用いて課題に対する考えを可視化して話し合いが行われている。この際も、個々それぞれの立場や、その根拠となる部分を確認し合いながら検討が進められるように留意している。

特に実践①の指導案にも記述されている「異なる考えや気持ちを共有する」ことを、言語内容ではなく言語形式を根拠に語ることの重要性を子どもたち自身が感じて、それぞれの考え(意見)の違いや根拠、そこから読み取っていることを比較吟味する場が成立するような教師の手立てが見られる。言葉への自覚を高めていくことを、場の設定だけでなく細やかな教師の支援によっても成立させようと意図していることを示している。

講習会後の実践②の本時案では「指導上の留意点」に、「Google Jamboard を用いて考えを出し合い、可視化することで、自分の考えを伝えたり、他者の考えを聞いたりすることへの意欲を高められるようにする」とある。実践①よりさらに「異なる考えや気持ちを共有する」ことの大切さを子どもたちが感じ取り、伝え合う意欲を高めることへの志向が明確に示されている。

(2) 自立へ導く：選ぶ。決める。考える・大人はどんな声かけをするか？

判断型学習課題は、あらかじめ子どもたち自身が選ぶこと、決めることが備わっている課題である。ただし、課題の多くは教師が設定しており、二択のことが多い。

実践①は課題は教師が設定して二択であった。実践②では課題は教師が設定しているが、4連の中から「最もキュンとした連」を1連選び、「キュンポイント」を付箋に書くという課題設定になっている。単なる課題表現の違いだけではないと筆者は考えている。子どもたちに伝わりやすい、感覚が伝わりやすい、考えやすいであろう「キュン」という表現で課題を出しているのである。これは、子どもたちを自立へ導くために、「大人はどんな声かけをするか？」と関わる変更点であると筆者は評価している。単なる分かりやすい、キャッチーな表現を用いただけとは考えていない。

講習会第1回目の質疑応答の記録の一部を見てみたい。

貞安：自律学習のなかで、どこまで教師が関わりを持っていけばいいか。公立校でもできることはないか。

久保・細萱：教えていけないわけではない。自律の段階を見て、教えるべきことは教える。

ブロックアワーでやるべきことも最初は教師が示す。子どもの様子を見て、進めていく。

異年齢での授業、一斉授業を主としない、特別支援学級を作らず「じゅうたんの部屋」を活用することは、難しいし、公立小との違いもあり苦労しつつ教員同士も話し合いつつやっている。

イエナプランについて考える時に誰もが持つ問いである。日本の公立の学校でも出来る「自立へ導く」手立てはないのかという問いだと読み替えて考えてみたい。それに対して、久保校長先生、細萱教諭からの返答が上に記されている。「教えていけないわけではない。自律の段階を見て、教えるべきことは教える。」段階があつて、子どもたちが、「選ぶ。決める。」そのために「大人はどんな声かけをするのか？」この講習会の後、貞安には、この質疑応答を明日の授業の具体にどう活かしたらいいのか、という自問があつたのではないかと筆者は推測している。

授業参観の後、短時間であつたが授業についての検討会を行った。その時に、貞安教諭から「キュン」を含む表現について、どうですかという質問があつた。筆者もこれは、あの講習会での質疑応答の具体バージョンだなどと考え、そのような返事をしたと記憶している。今回、この論考をまとめるために、記録を読み返し整理しつつ、それはやはりそういうことだったのかという推測が、評価に変わっていった。

「子どもたちの生きた文脈」からの学びという、イエナの言語教育の大前提とも関わるものである。

(3) 違って当たり前：異年齢。同じことをしていない。その中での協働。

イエナは、異年齢学級である。今回の実践①②はともに、中学3年生の実践で、同じ年齢のクラスで行われたものであるため、前提が異なる。ただし、違って当たり前ということは、判断型学習課題そのものに含まれている条件だと考えることできるかもしれない。そんなことを貞安のコメント「〇〇さんたちと話して、この表現の良さが感じられたんだね！」(資料5)から筆者は考えたが、拡大解釈すぎるかもしれない。

(4) 学びのオーナーシップ：子どもにある。個に応じた発達を支援する。

(5) 文化にする：問いかける。待つ。繰り返す。日常を。

この2点については、資料5の貞安の次のコメントを見てみたい。

「指摘したり、批判したり、そういう視点というか眼は大切だし、そういう読みができる面白いけれど、そこからさらに何でそんな書き方なのか、筆者はそれをどうつなげて読んでほしかったのか、そんなことを考えながら読める読者でありたいですね。」あくまで学びのオーナーシップは子どもにある。また、子どもの一人ひとりの振り返りに、教師がコメントを返すことが、「個に応じた発達を支援する。」ことの具体である。「問いかける。待つ。繰り返す。」これは、「文化にする」ことであり、授業の一場面、コメントを書くという日々の積み重ねの中で、これを実践しようとされたと筆者は評価している。

4. おわりに

本稿では、「イエナプラン講習会」前後に行った2つの実践について、講習会で得た知見をもとに分析および考察を行った。実践①②ともに筆者は複数回参観をさせていただき、貞安ともオンライン、対面での検討会を行った。考察や価値付けは、本稿をまとめる段階でのものである。令和5年度も共同研究は継続する。本稿を、本研究課題だけでなく、これからの共同研究にも繋がる共同研究者である貞安との対話的活動のプロセスと位置づけている。

最後に、石井英真(2020)の次の記述を引用する。

思考する必然性を生み出す上で、教科書でよく見かける、不自然な「問題のための問題」ではなく、実際に生活や社会で直面するような状況に即して問題場面(真正な課題)を考えることも有効です。

「思考する必然性を生み出す」ことは、どの教科に限らず、どの教材でも、「学習者の責任感と本気の追究を生み出す有効な方法」である。

これは、『セレストアン・フレネ 言語の自然な学び方』(2015)の次の記述とも呼応する。

私たちが生きていくうえでどうしても経なければならぬ重大な学習のなかで、はっきりと科学の手続きを踏んで行われるものなど、ひとつとして、どこを探してもひとつとしてありはしないのです。子どもが歩くことを覚えるのは、歩きながらです。しゃべるのも、しゃべりながらですし、絵を描くのも、実際に絵を描くことをとおしてです。これは学校教育を含むすべての教育に妥当するきわめて一般的・普遍的なあり方であると言って言い過ぎではないでしょう。私たちはこの確かさを拠りどころにして、自然方式を築き、実践してきたのです。

私たちの共同研究もこの言葉を絶えず念頭において継続していければと考えている。

参考文献

白井俊：OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー、資質・能力とカリキュラム—、ミネルヴァ書房、79、2020。

文部科学省：中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編、東洋館出版社、2019。

OECD ラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030 仮訳：秋田喜代美他(2022.5.30閲覧)

<https://www.bing.com/ck/a?!&p=0cbfbb4d4cda3c555d93a289dacb82a0d7acfa7bc9c34895b55c42381f177168>

石井英真：授業づくりの深め方、ミネルヴァ書房、105、2020。

セレストアン・フレネ(里見実訳)：言語の自然な学び方、太郎次郎社エディタス、12、2015。

町田守弘：国語教育を楽しむ、学文社、2020。

田村学：学習評価，東洋館出版社，2021.

リヒテルズ直子：オランダの共生教育，平凡社，2010.

中川綾：あたらしいしょうがっこうのつくりかた，ナガオ考務店，2019.

フレク・フェルトハウズ，ヒューバート・ウィンターズ，リヒテルズ直子訳：イエナプラン共に生きることを学ぶ学校，ほんの木，2020.

リヒテルズ直子：イエナプラン実践ガイドブック，教育開発研究所，2019.

引用文献

- 1) 白井俊：OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー，資質・能力とカリキュラム—，ミネルヴァ書房，79，2020.
- 2) 石井英真：授業づくりの深め方，ミネルヴァ書房，105，2020.
- 3) セレスタン・フレネ（里見実訳）：言語の自然な学び方，太郎次郎社エディタス，12，2015.